

第1回SDGsに関する万国津梁会議 議事概要

日 時:令和元年8月6日(火)13:00~15:00

場 所:メルキュールホテル沖縄那覇

出席者: 蟹江 憲史 委員、佐喜真 裕 委員、島袋 純 委員、
玉城 直美 委員、平本 督太郎 委員

1 委員長、副委員長の選出

委員より、委員長を島袋委員、副委員長を蟹江委員とする旨の提案があった。
同案が委員の全会一致により決定。

2 議事

事務局から、会議のテーマである「「沖縄らしいSDGs」について」、現在の沖縄県の考えを説明。

【沖縄県の考え】

- ・県では令和元年度より県庁をあげてSDGsの取組を本格的に開始することとしている。
- ・取組を展開するにあたっては、沖縄の地域特性を踏まえていきたいと考えているため、本会議のテーマとして「沖縄らしいSDGs」を設定している。
- ・県としては、当会議のテーマを踏まえ、県民の皆様の声を聞かせていただきながら、市町村とも連携し、全県的な取組に繋げていきたいと考えている。
- ・新たな振興計画においては、SDGsの理念を盛り込むとともに、当会議のご意見も踏まえたくうえで、展開していくことを検討していきたい。

【意見交換】

(蟹江副委員長)

「沖縄らしいSDGs」を展開していくにあたって、沖縄でどんなことをやりたいという提案を5つほど資料にあげた。海洋プラスチックや貧困に重点を置いた沖縄版のSDGsを設定し、市民参加、パートナーシップの強化を行いながら、計画に反映させていくというのが、一つの案である。また、SDGs未来都市恩納村のような優良事例を創出し、先進的なモデルを作っていくところからスタートするのも非常に大事である。

◆(蟹江副委員長)提出資料より

沖縄県におけるSDGs推進へ向けた提案

1. 県の重点課題(例えば海洋プラスチックや貧困など?)に重点を置いた「沖

「沖縄版SDGs」の設定

- ・ 経済優先型ではなく、環境、社会を含めた新たな未来基準の発展モデルを提示
- 2. 目標設定後は総合計画や各種計画へ反映
- ・ 市民参加、パートナーシップの強化で市民主体の計画づくりも一案
- 3. 新たな計測方法を含めて進捗を測る
- ・ 目標達成済み項目は県民の誇りへ
- 4. サステイナブルな取り組みを推進する自治体や企業・事業を支援→関東経済産局モデルの沖縄版の構築
- ・ 既存の取り組みでサステイナブルな取り組みをしているところも応援
- ・ 県や地元経済へのメリットも(例:健康推進→医療費関連支出の削減、地産地消→雇用創出効果など)
- 5. 優良事例の創出
- ・ SDGs未来都市恩納村モデルの構築からスタート

(平本委員)

沖縄県の強みを活かしたSDGsの推進として、離島ならではのインフラや技術が今後強みとして発揮できるのではないかと。また、観光という強みを持つ沖縄県は、ワーケーションのような、健康とクリエイティブな仕事の両立を可能にする環境づくりについて、SDGsとリンクさせながら取り組んでいくことができるのではないかと。

平和という観点では、たとえば気候変動のような、主体がいない暴力への対応を含めた広義の平和を押し出しながら、自治体をまたぎ連携をして行くことも可能ではないかと。以上の3点で沖縄らしさということを発揮することによって、世界における存在価値を高めていけると考えている。

(玉城委員)

SDGsに関しては、マスコミやソーシャルメディアとの連携も重要である。知事にはSDGsの広告塔として、各現場、教育現場に対話の場を設置して出て行っていただければいいのではと考えている。

ラオスでは、世界で最も多く地雷が存在する国の一つであることもあり、独自に18番目のSDGs目標を設定している。もし、17の目標に沖縄の目標が入らないものがあれば、沖縄18番目の目標を市民と対話をしながら決めていくことも可能かと思う。

(佐喜真委員)

おきぎんグループはSDGs宣言を掲げさせていただいている。地域経済との共創が取り組むべきSDGsの最重要項目であろうと考えており、今後この取組を深化させ

ていこうと考えている。主な取組としては、健康、あるいは環境、教育、福祉、文化等の分野において沖縄の振興に貢献する方々を支援することを目的とした、ふるさと振興基金の設立や、夏休み親子 STEM 体験教室の開催、世界銀行債券の取り扱い、クリーンビーチ活動等がある。クリーンビーチ活動については、新入行員が企画、運営を行っており、今年度で終了させることなく継続して取り組みながら、活動の輪を広げていきたいと考えている。今後も、課題の抽出や、KPI の設定等を行い、段階的な高度化を図っていきたいと考えている。

(島袋委員長)

SDGsの用語に「人間の安全保障」というものがある。これは、「誰一人取り残さない」という言葉と密接な関わりがある言葉であり、すべての人々の尊厳を大切にするという意味である。これを、県内外・国内外の多様な主体との交流と多文化共生社会によって実現することが「沖縄らしい SDGs」のベースとなるのではないかと考えている。

県民を巻き込んで課題を発見し、共有していくような制度が必要だと考えている。このSDGsに関する万国津梁会議をもとに、県民円卓会議を設けて県民の意見を拾い上げていくべきではないか。それから、振興計画について、169 のターゲットと同計画の目標のすり合わせを行い、反映させていくことも必要であると思う。

(蟹江副委員長)

県民円卓会議や、ターゲットと振興計画のすり合わせは非常に大事な提案だと考えている。行政主導の場合、縦割りで話が進まないところも出てきてしまうため、民間のアイデアで進めていけるような仕組み、アクションプランにより、逆に外から行政を変えていくことが必要であると思う。横断的にかついろんなアクションが出てくるような、色々なアイデアが出てきて、そこに銀行もお金をつけていったりという風になると、皆やる気が出てくると思う。

(平本委員)

金沢工業大学では、「プロジェクトデザイン」科目が全学部必修の授業になっている。同授業では、2年次において近隣の自治体と連携し、実際に地域で抱える課題に対する解決策の企画を半年間行い、残りの半年で自らその有効性を検証していくことをやっている。その上で、有効性が確認できた企画については自治体が必要な案を議会にかけ予算化し、実際に実行していくという取組を毎年継続的に行っている。県民円卓会議においても、ただ議論をしていくだけではなく、参加者が主体的に活動し、それが継続的に行われていく仕組づくりをしていくというようなところが重要であると考えている。

(玉城委員)

市民に開かれた場を設置していくのは賛成だが、現在、県内のSDGs認知度はおおよそ 30%以下となっている。SDGsについて前提となる知識が無い中での話し合いとなってしまうと、そもそも論になっていってしまわないか。まずはしっかり周知を行い、そこで各企業、各自治体、マスコミがお互いに連携を取ってそこで初めて沖縄の中でSDGsの主体性が生まれて、円卓会議をする上で市民が自ら欲して出てくるような場にしていくべきではないか。それともう一点、女性、外国人、障害者といった、普段取り残されがちな方々の意見を取り上げていくような仕組みにしなければ、ただやっただけの円卓会議になってしまう。

(佐喜真委員)

SDGsの目標は遠大で崇高な目標となっているので、一見すると、とっつきにくい印象を抱いてしまう。広く県民参加型の活動を求めるのであれば敷居を決して高くするのではなく、小学生、中学生、高校生等に対する啓蒙の仕方、カードゲームのような形での周知等も検討していく必要があると思う。この辺りについて、平本委員よりご紹介いただけたらと思う。

(平本委員)

SDGsイノベーション教育のためのツールとして、「THE SDGsアクションカードゲーム X」というものを作っている。同カードゲームは、オリジナルカードを作れるという点で非常に高く評価を受けており、自分達の地域の課題や強みに関係するカードを作ることができる。沖縄でもオリジナル版を作っていただくと、非常にすっと入っているのではないかなと思う。

「人間の安全保障」について、まさに沖縄らしいということで、これに重点をおいていくというのは、昨今の流れからも非常に重要であると思う。例えば広島県や長崎県とも広義の意味での平和という観点を強く押しだして、連携をしていくのもありうるのではないかな。また、先程、沖縄 18 番目の目標という話もあったが、そういった分かりやすい表現をしていくのも非常によいと思う。これを、観光や離島といった県外の人を持つ沖縄のポジティブなイメージと組み合わせながら行っていくといいのではないかな。

(玉城委員)

「沖縄らしい」という点について、2030 年までにおそらくほとんどの琉球語の話者、言語の話者がいなくなっていくという中で、琉球の文化と芸能をどうしていくのかということも重要な課題であると思う。

(蟹江副委員長)

円卓会議的なものを県民全体で開いて、沖縄が持続可能であるための沖縄らしいあり方というものを議論していくということは、それ自体がSDGs的であるように思う。こうした会議を開くと、文化や言語についての話も出てくると思う。そういったところから、「自分達が作ったから大事なんだ」という方向にしていったらいいと思う。

「誰一人取り残されない」というところは一番大切なSDGsの理念だが、一番忘れられてしまっているところでもある。ジェンダーや、外国人、障害者に関することは、本来一番重要であるはずなので、そこに目を当てることというのは「人間の安全保障」を一人一人どうするのか考えることにもなると思う。こうした発想で沖縄らしさを出していき、来県する観光客に対してもそういう協力をして、大切なものが何か気づいてもらって帰って頂くというのが非常に大事になってくるのではないかな。

(佐喜真委員)

観光の話について、沖縄県の今の状況として、観光客数が今やハワイに迫ろうという勢いで増えている一方で、軋轢やギクシャク感が出ている地域もある。そのため、地域の再生とバランスをとって、一時的に終わらせず、持続可能な観光資源として活動していく、そういった取組を織り込んでいくことが必要なのかなと考えている。

かつて沖縄県は平均長寿、日本一を誇った時代が長く続いていたが、現在は順位を落としてきている。県内の人間ドッグの有所見率も全国平均と比較して10%以上悪い。SDGsの目標には「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する」とあるため、沖縄県もこうした状況に対して積極的に取り組んでいく必要があると感じている。

(蟹江副委員長)

ニューヨークでは、今ほとんどプラスチックは使われなくなっている。この1年でがらっと変わっており、ペットボトルもなく、ストローも紙に変わっている。そうすると、印象がバツと変わってくる。沖縄らしいSDGsにおいても、売りとなるようなところをまず出して行っていただきたいと思う。

(島袋委員長)

円卓会議のゴールについては、委員内である程度合意を得て、共通理解を探っていければと思う。沖縄子どもの未来県民会議の仕組みをイメージしている。NGO や様々な役職者、メディア等を真ん中に置いて座っていただき、課題出しをしていただ

く。それから広く県民に開かれた場を設定して、県民がテーブルを囲む形で参加する。このやりとりをしながら、県民は県民の方でグループワークをして意見をプールしていき、多くの課題を洗い出す。あるいは新しい政策を提言していくようなイメージである。

先程、広報が重要だという意見があったため、1回目は、SDGsとは何かということに関してある程度知識のある方々をステークホルダーとして招聘し、県民もSDGsに関心のある方々に来ていただくという形にしたい。そして、2回目の会議における成果を委員へ戻すという形でやっていけたらというのが私の案である。

(玉城委員)

この円卓会議の位置づけはどうか。今後沖縄県SDGsを進めていく中で、実験的にまずやっていくのか、それとも、トライアルも含めて本番なのか。

(島袋委員長)

イメージしているのは、多様なステークホルダーの方に参加していただき、県民が周りを取り囲むという形である。この形でやっていくと、かなり多くの論点が出てきて、かなり幅広く課題がでてくると思っている。

(蟹江副委員長)

円卓会議を開催するにあたっては、WEB を活用してやる方がよいと思う。その場に集まる人と同時にインターネット上のプラットフォームみたいなものを作り、その場に来られない方からも広く意見を求めるとよいと思う。

(島袋委員長)

ネットの利用を本格化して、一回の会議で終わりではなく、事前事後にネットで情報を交流しながら、意見を届けながらまとめていく必要があると思う。

県民円卓会議は、SDGsの5P (People、Planet、Prosperity、Peace、Partnership) の分野で作れないか。この分野を年内か、次回か、随時開催して全分野網羅するというイメージを今のところ持っている。

(平本委員)

SDGsの話をする時は、バックキャストの観点が必要となる。他方で、実際にSDGsの議論を進めていこうとなった時に、目標設定ではなく課題出しから始めてしまうこ

とがよくある。それ自体はもちろん必要ではあるが、併せて、初めから目標となる「あるべき世界」について描いていかなければならない。これを行うか行わないかによって、企業改革の際にも成果に対して顕著に違いが出てくる。課題出しから始めてしまうと、対立構造が浮き彫りになってしまうことがある。そうではなく、未来に関する情報を先に提示して、それを前提に皆が理想とする「あるべき社会」というものを描いていくと、自分ごとになるだけでなく、俯瞰的に物事を見ることができるようになる。するとポジティブに会話が生み出されるようになり、コミュニケーションが円滑になり、主体的な意見が出やすくなる。

(島袋委員長)

県民円卓会議の設置に関しては、委員の皆様の意見を伺いながら進めていきたいと考えている。また、次の振興体制にSDGsを入れ込んでいくという目標についても、次回以降の万国津梁会議で議論できたらいいと思う。